

英語の時間表現の指導上の問題点

On Some Problems Concerning Structures Expressing Time in English

棚瀬 江里哉

Eriya Tanase

ABSTRACT

Structures expressing time have always been one of the major problems for Japanese students of English, presumably because it is so difficult to find logical correspondence between the tense-aspect systems in English and Japanese. In trying to deal with this problem, this paper emphasizes the speaker's point of view and how it relates to the expressions he or she uses. Followed by a summary of the description of English tense in King (1983) and some comments on it, the tense-aspect system will be discussed, and some examples will be given of problems concerning teaching structures expressing time in relation with the speaker's point of view.

Key Words: tense, aspect

1. はじめに

日本人が英語を学ぶときの大きな文法上の困難点の一つが時制と相である(升川(1982)2、3章参照)。事実、北星短大英文学科の学生たちが書いた自由英作文の中でもしばしば見られるミスが過去の出来事を現在時制を用いて表現しているものである。例えば、夏のキャンプの思い出を述べた作文で、過去時制も用いている中に、We can't cook. や I want to swim. や At night, we look at the sky. といった文が混じっている。これは、単なる不注意、ケアレスミスともいえるかもしれない——スタイル上の効果をねらったものではないのは明らかである——が、より根本的な問題が含まれているように思われる。

たとえば、升川(1982:9)によれば、「現実の time を文法としての tense で切り取る」となると、日本語と英語とでは、その切り取り方に異

なる点が多いことは事実であって、これが我々や生徒を悩ませる trouble spots の一つになる」。升川が挙げた例では、

1)a. I see.

b. 判りました。

のように、英語の現在時制に日本語の「～ました」が対応しているものがある。

かと思うと、

2)a. The train leaves at six.

b. 汽車は6時に出発します。

のように、同じ英語の現在時制なのに「～ます」が対応し、しかも内容的には未来に関する表現になっているものもある。英語と日本語の時制の関係がどうなっているのか、学生が混乱した

としても不思議はないであろう。また、完了相が日本人にとってわかりにくいものであるということは、しばしば指摘されることである(大西、マクベイ(1995:128)など)。いずれにせよ、英語の時制と相は日本人学習者にとって理解しにくいものであり、しかも、実際に用いられる英語においても常に関わってくるので、その指導を考えるのは意義あることと思われる。なお、時制(tense)と相(aspect)の双方、さらには be going to など取り扱うので、まとめて時間表現と呼ぶことにする。

本稿で主に扱いたいのは、コミュニケーションに役立つ文法、コミュニカティブ・グラマーの観点からの、英語の時制と相における意味論・語用論的な含意、ニュアンスという切り口であり、特に発話において話し手の視点、意識が表現の選択にどう反映されるか、ということである。まず、この問題を扱っているKing(1983)のテンス(註1)に関する部分(pp.104-116)を要約、紹介し、コメントを加えてから、時制と相に関して考察し、最後に具体的な指導上の問題をいくつか取り上げる。

2. King(1983)における「テンス」の扱い

あるテンス形式は実世界における複数の時を表しうるのだが、その形式と常に結びつく「時」はないのだろうか。この問いを考えるに当たっては、コミュニケーション行為と、コミュニケートされた情報の関係を理解することが必要である。あらゆるコミュニケーションはある時において起きる。話し手からすれば、この「コミュニケーションの時」time of communication (TOC)がほかのすべての時を見る基準となるものであり、話し手にとっての「現在」である(註2)。

(p.104)

まず、様々な現在形式の用法を一つにまとめ

てみたい。現在形式は、話し手が(実際の時は別にして) TOCと結びつけ、TOCに含めたい事態に関して用いられる。つまり、「現在」というのは、発話時と同時ということではなく、話し手にとっての「現在」と言うことである。

3) The quarterback drops the ball.

のように、実際の現在時と現在形式が結びつくこともあるが、現在形式の文法的意味は、話し手の時間的視点と結びついているのであり、問題となる時は主観的なものである。

話し手はTOC(現在)の範囲の中にかかなる実時間を含めてもかまわない。無時間的現在や習慣的現在はTOCに含まれる。

4) The Ohio River flows into the Mississippi.

5) We have liver and onions for supper once a week.

二つ目の文では、発話時において起きていることではなくても、TOCにおいては成り立つとされている。

現在形式が未来の出来事を表すときには、話し手は未来を現在の一部と見ている。つまり、未来の状況がTOCに引きずり込まれている。

6) We arrive in Miami on New Year's Eve.

同様に現実の過去に属する事態が話し手の現在に引きずり込まれることがある。

7) Dad tells me that you want to quit school.

“telling”は過去に起きる(起きた)ことだが、話し手にとっての現在に含まれている。結局、現在形式は現実のどのような時間にも文脈に

じて対応させることができる。
(pp. 104-107)

しかし、話し手が状況を現在時視点から切り離すこともあるわけである。このことが、過去形式と未来形式の文法的意味を理解する鍵となる。話し手が現実を時間的にどう捉えているかについて、2分法を取り入れることにする。状況が現在時視点に含まれるか否かである。後者であるならば、適当な非現在時視点（過去か未来）と結びつけなければならない。

間接話法 She told me that I looked fine. における過去形式の用法を見してみる。埋め込まれた文の動詞(look/looked)は実時間の過去を表すこともあるし

8)a. She told me that I looked fine last night.

現在を表すこともある。

8)b. She told me that I looked fine, so I guess I don't have to change my clothes after all.

後者の場合、現在形式を用いることもありうる。

8)c. She told me that I look fine...

look/looked fine の違いは、事態に対する話し手の時間的視点の差である。話し手は look が表す状況を彼女の行為と結びつけてもよいし（過去形式 looked）、自分のコミュニケーション行為（及びその視点）と結びつけてもよい（現在形式 look）。すなわち、テンス形式の意味が文脈と矛盾しない限り、話し手はどちらの事態もどのような視点から見てもよい。過去形式の意味は、実時間の過去とは関わりなく、現在の視点から除外され、過去の視点に含まれる

ことである。
(pp. 107-109)

未来形式の文法的意味は、現在の視点から除外され、未来時の視点に含まれる、ということである。ある事態に対する未来時の視点は必ず予測ということと関わってくる。予定、意志、意図などでは、明らかに視点は未来に向けられており、その事態が実現するかどうかの予測と関わっている。

9) That'll be John at the door.

の場合は現在に関する予測で、上で見た、未来の状況が現在に引きずり込まれたのとはちょうど逆の例、現在の状況を現在の視点から切り離し、未来時の視点に引きずり込んだ例である。結局テンスとは、話し手が事態を結びつける主観的、心理的な時を表す意味論的な概念である。
(pp. 111-113)

二つの異なる形式が同じ実時間を指示しうる場合、話し手の選択はどのようになされるのだろうか。テンスが話し手の視点と結びついている以上、その選択は主観的なものになるだろうし様々な形をとりうる（上の、She told me that I looked fine. 以降を参照）。コンテキストは重要だが、形式を決めるのはコンテキストではなく、事態に対する話し手の視点である。
(pp. 113-116)

3. 時制と相と話し手の視点

最初にこの King の論文を取り上げようと思ったのは、鈴木・安井(1994:220)の相に関する章で以下の記述を見つけたからである。

「相という概念は、時制が話し手の視点から独立して成り立っているのとは異なって、話し手が状況をどう見ているかという、ものの見方

に依存するものである。したがって、相は、話し手の視点から独立した客観的事実を反映しているものではない(King, 1983)。」

話し手の主観的な視点が表現を決定する、ということに関して研究を進めたいと思っていた筆者にとって King の論文は参考になるであろうと思われた。事実参考になったのだが、驚かされたことがあった。

上の検討から分かるように、King は、(鈴木たちがいうように) 時制を話し手の視点から独立している、とはしていない。逆に、時制は話し手の視点によって決定されると強調している。ちなみに、King の論文のアスペクトの章の結びに、「アスペクトは...話し手が状況をどう見ているかを表す。...テンス及びオリエンテーションという意味論的概念と同様に、アスペクト形式の意味は客観的事実やコンテキストとは関わっていない」(p146)とある。また、別の箇所では、「テンスが...実世界に対する話し手の個人的な時間的視点のはたらきであるのと同様に、アスペクトは実世界の状況の構造に対する話し手の個人的な視点のはたらきである。」(pp130-131)とある。つまり、相(アスペクトとオリエンテーション)という概念に限らず、時制(テンス)にも話し手の視点が含まれているということである。

この考えを採れば、現在形式が未来や過去を表したり、その他例外的用法とされてきたものを統一的に扱うことができる、という利点があるように思われる。下で述べる現在完了と過去(have learned/learned)、現在と現在進行(lives/is living)の例のように、話し手の視点によって選択する形式が変わる、ということも納得しやすい。ただし、時間表現に話し手の視点が含まれているということ、話し手が全く好き勝手に時間表現を用いてよいということとは、同じではないということも押さえておくべきであろう。やはり、実世界の時と原則として対応

する(傾向のある)時間表現は存在するわけである。

4. 時制・相の体系と未来の扱い

King は(形態論的ではなく)意味論的観点から、未来を現在・過去と同格のテンスとすると述べている。これに対して、例えばリーチは will/shall の意味をよく表す prediction には話し手の判断が含まれるため、中立、無色に近くとも、現在・過去時制と同格には扱えないと言っているが(リーチ(1976:85)参照)、King の論点からすれば、現在、過去もそもそも話し手の主観と結びついているのであり、未来を別扱いすることはない、ということになる。ただし、近年、英語学者の間では、過去と現在の二つの時制、完了と進行の二つの相を認める立場が多いと思われる(Huddleston(1984:133)、グリーンバウム、クワーク(1995:82)、安藤(1983:59-60)等参照)。

しかし、学習者への指導の際に、「英語には未来時制はない(または、will は未来の助動詞ではない、または、英語の未来は現在時制である)」という説明で学習者は納得するだろうか。未来時制を認めるかどうかは別にして、なんらかの形で現在、過去、未来を対応させる工夫が必要ではないだろうか。すなわち、英語学習者に対する時間表現の指導という観点からは、Celce-Murcia, Larsen-Freeman(1999:110)が述べるように、「英語の時制-相の体系を記述する際には、実際に用いられている未来時に関する形式と意味の組み合わせを説明する必要がある」のであり、具体的には、現在、過去、未来の3時制に単純、完了、進行、完了進行を組み合わせて、単純現在、現在完了、現在進行、現在完了進行、単純過去、過去完了、過去進行、過去完了進行、単純未来、未来完了、未来進行、未来完了進行の計12の形式の体系を考えるのが妥当と思われる。ただし、未来時制を認めても

よいとする安井(1997:278)の言うように、「言語的事実」としては、ほとんどすべての助動詞は未来のことに関係しており、その中で「法的色彩の最も少ない用法を持っている」のが will (shall) であるということはふまえておかなければならないだろう。

また、日本語に関しては、冒頭で取り上げたような問題、さらに、

10) a. ジョンはメアリをたたいている。

b. John is hitting Mary.

であるが

11) a. ジョンはメアリを知っている。

b. *John is knowing Mary.

c. John knows Mary.

のような問題を含め、指導上有効であるかぎりにおいて英語と比較すべきであろう。

5. 時間表現の指導に向けて

英語の時間表現を指導する際に、話し手の視点、意識が問題になるのではないかと思いはじめたのは、筆者が担当した英文法の授業で多くの学生が次の問題につまずいたからであった。

Q. 過去に中国語を5年間習ったことがあるので、いま中国語ができる、という状況ではどちらを用いるか。

12) a. I learned Chinese for five years.

b. I have learned Chinese for five years.

出題者の意図は、過去の出来事が現在の状態につながっているのだから、現在完了の b. が正解ということである。筆者もそう説明した。しかし、学生たちの言い分は5年前から現在までなら判るけど、例えば10年前から5年前なら

現在とつながっていない、ということであった。実際には、主観的にであっても話し手の意識の中では結びついているとすれば確かに現在完了を用いるのだが、筆者にはこの問題は欠陥問題ではないかと思われてきた。問題は「状況」という言葉にあると思う。すなわち、事実そういう状況であったとしても、この発話が「だけどもうやめちゃって、今はロシア語を習ってるんだよ」という文脈でなされたとしたら a. の過去時制が正解になるであろう。話し手の意識がこの事態を現在から除外しているからである。すなわち、(少なくともこの質問においては) 客観的な状況よりも、話し手の主観的な意識の方が用いるべき表現を決定するのである。

まとめると、同じ事態であっても、話し手がそれを現在に含めて意識すれば現在完了、現在から除外して意識すれば過去で表現するということになる。同様の例を挙げると、私の兄は現在ロンドンに住んでいるという状況で、

13) a. My brother lives in London.

b. My brother is living in London.

どちらを用いることも出来るのだが、b. の方は、当面、一時的に、といったニュアンスを帯びることになる。すでに述べてきたことと重なるが、このような問題は、相に関しては、コムリー(1988)の訳者あとがきにおいて山田が分類している「話者の視点にかかわるもの」と結びつくであろう。

時制に関しては、含意、ニュアンスに関わるものとして、現在の気持ちや考えに言及しつつていねい、婉曲を表す過去がある。リーチ(1976:21)の例文を引用する。

14) a. Did you want me?

b. Do you want me?

のペアでは、a.の方が間接的で丁寧なニュアンスであり、b.にはぶっきらぼう、横柄な響きがある（なお、国広が同書訳注で述べているように、日本語にも同様の現象——お呼びでしたか／お呼びですか——が見られるのは興味深い）。

この、英語の丁寧の過去は、丁寧を表す進行形と重ねて過去進行構文を作り、さらに丁寧なニュアンス（「二重に自己卑下的な含み」）を加えることが出来る（リーチ(1976:22,43)参照）。

15) I was hoping you would give us some advice.

未来に関する表現では、

16) a. I will leave tomorrow.

b. I am going to leave tomorrow.

c. I am leaving tomorrow.

d. I leave tomorrow.

e. I will be leaving tomorrow.

などの、ニュアンス、使い分けが問題となろう。ここで、くわしく触れる余裕はないが、a. will は単純未来（未来時制）又は意志未来、b. be going to は事前の意図、計画、c. (未来を表す) 現在進行形は事前の手配、約束（意図含む）、d. (未来を表す) 現在時制は確定的な未来（意図含まず）、e. 未来進行形は意図を含まない成り行き、といったニュアンスを持つことが多い（トムソン、マーティネット(1988)19章参照）。話し手（主語）の意志、意図が含まれるかどうかを使い分けをする上で重要なポイントである。

註

1. ここで本稿で用いる用語、及び本稿の立場を述べておく。tense「時制」は、「現在」、「過去」、「未来（後述）」の3つを認める。aspect「相」は、「進行」と「完了」（およびいずれでもないもの「単純」と両者を組み合わせたもの「完了進行」）を認める。なお、King は、tense と、aspect（「進行」にあたる）と、orientation（「完了」にあたる）という用語を用いており、それぞれ、本稿では「テンス」、「アスペクト」、「オリエンテーション」とする。すなわち、King の「アスペクト」と「オリエンテーション」を合わせたものが本稿における「相」である。
2. 下にあるように、time of communication、すなわち、話し手にとっての「現在」は、実際の時とは別のものであり、発話時のことではない。発話時を表す time of speaking（安井,1996:274）、time of utterance（デクラーク,1994:118、Huddleston(1984:145)）などと紛らわしいので注意されたい。

参考文献

- 安藤貞雄、『英語教師の文法研究』（大修館）、1983
- バーナード・コムリー（山田小枝訳）、『アスペクト』（むぎ書房）、1988
- （Comrie, *Aspect*, Cambridge UP, 1976）
- レナート・デクラーク（安井稔訳）、『現代英文法総論』（開拓社）、1994
- （Declerck, *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Kaitakusha, 1991）
- シドニー・グリーンバウム、ランドルフ・クワーク（池上嘉彦、他訳）、『現代英語文法〈大学編〉』（紀伊国屋書店）、1995
- （Greenbaum and Quirk, *A Student's Grammar of the English Language*, Longman, 1990）
- R. Huddleston, *Introduction to the Grammar*

- of English*, Cambridge UP, 1984
- L. King, "The Semantics of Tense, Orientation, and Aspect in English" *Lingua* 59, 101-154, 1983
- G.N.リーチ (国広哲弥訳)、『意味と英語動詞』 (大修館書店)、1976
(Leech, *Meaning and the English Verb*, Longman, 1971)
- 升川潔、『使える英文法へ』 (開隆堂)、1982
- 大西泰斗、ポール・マクベイ、『ネイティブスピーカーの英文法』 (研究社)、1995
- 鈴木英一・安井泉、『動詞』現代の英文法8 (研究社)、1994
- AJトムソン、AVマーティネット (江川泰一郎訳注)、『実例英文法 (第4版)』 (オックスフォード大学出版局)、1988
(Thomson & Martinet, *A Practical English Grammar*, Oxford UP, 1986)
- 安井稔、『英文法総覧——改訂版——』 (開拓社)、1996